

豊後国速見郡由布院の村落構造

一 近世初期細川藩における農村支配

——「手永」の成立を中心として——

松 本 寿 三 郎

序

近世細川領において地方行政単位として「手永」が用いられたことは周知の事実であり、その性格もすでに諸先学によつてほと明らかにされたところである。⁽¹⁾「手永」制の果した役割は、細川氏による約二三〇年の肥後支配期においてごくまれにしか百姓一揆が発生していないことでもその一端を知ることができるが、農民の把握に極めて有効な体制であつたといえよう。「手永」制は細川氏によつて考案されたもので、金沢藩の「十村」制や諸藩の「組」と揆を一にするもので、近世大名の農村把握の一形態を示すものであろう。

細川氏における「手永」制は新しく入国した豊後および小倉支配時に由来する。従つて肥後藩における「手永」制の研究は、小倉藩時代に遡及せねばならない。

本稿はそのような意味から、細川氏の豊後入国および豊前、豊後

の地方行政機構について確かめようとするものである。

細川氏の豊後入国前後の事情をみると、文禄役中の大友義統の失脚に伴つて、旧大友領である豊後諸地域は文禄三年所謂豊後七人衆に細かく分け与えられた。その後も幾度か変遷を経ているが、関ヶ原における東西両軍への分裂によつてさらに変貌をとげた（第一巻参照）。すなわち慶長五年関ヶ原役にあたり毛利輝元に預けられていた大友義統は大阪方について豊後の奪還をはかり、中津城の黒田孝高・木付城の細川忠興（城代松井康之）と戦ひこれに敗れた。

細川氏が豊後に入国したのは家譜⁽²⁾によれば慶長五年春のことで、前田利家と徳川家康を和せしめた功により杵築六万石を加増せられたことによる。よつて松井康之を城代家老として杵築に派した。杵築城は前年五月城主早川長敏が府内城に移封されたあとである。

第一表 豊後国における諸侯分封

	文禄2	文禄3	慶長2	慶長4	慶長6
府内城	早川長敏	早川秀成	福原直高	早川長敏	竹中重隆
岡城	中川秀成	熊谷直陳	"	"	中川秀哉
安岐城	寛家能	"	"	"	細川忠興
富米城	竹中重隆	"	"	"	細川忠興
高田城	福原直高	太田重正	"	"	稲葉貞通
白杵城	毛利高政	"	"	"	毛利高政
佐伯城	毛利重政	"	"	"	木下延親
日出城	前田玄以	早川長敏	細川忠興	細川忠興	細川忠興
木付城	宮本長次郎	"	"	"	"
日出城	"	"	"	"	"
日田城	"	"	"	"	"
由布院	(代) 松井康之	加藤清正	三、四		
肥後領					

「大分県政史」通史編による。氏名の横の数字は石高。

関が原役後には豊後の情勢は一変した。国東郡の熊谷直陳・寛家純は大坂方について滅び、中津の黒田孝高は功により筑前五二万石を与えられて転じ、細川忠興もまた豊前八郡・豊後二郡（国東・速見）三九万石を領して中津城に入り、のち小倉城に移った。以来寛永九年加藤忠広改易後の肥後に入封するまでの三二年間小倉藩を領有したのである。

以上のように小倉藩領にも関が原役以前の所領と関が原役以後のものがあつて、地方行政上若干の地域差がみられるようである。とくに本稿における史料を多く速見郡に求めたため速見郡の場合について見ると、この地は細川氏がもつとも早く拝領した土地であるほか、江戸御料所である由布院・横灘および老臣松井氏の知行地枳築をふくんでいるなど複雑な関係にあるように思われる。慶長一六年における同郡内の細川領は横灘・由布院と木付（杵築）の二区に区分され、その性格も異なる。

すなわち由布院・浜脇村・南石垣村・別府村の計一四、〇五二石余は羽柴越中守代官仕分であり、この地は「人畜改帳」において江戸御料所分とされている。一方枳築の下庄村・上庄村・蔵田村・真那井村・上八坂村・下八坂村・計六、三四〇石余は羽柴越中守知行分として記載されている。これによつて由布院・横灘の地が藩領たる他の地域と性格を異にしていると見えよう。而してこの江戸御料所の代官には老臣松井康之が任ぜられた。その理由を家記は次の如く述べている。

松井へ代官ヲ命ジタルハ先年関ヶ原乱ノ節ノ奉公、且ツ兼テ無疎意心底、又先年秀吉ヨリ石見半国十八万石ヲ以テ宛テ行フ可シト在リタル節辭退シタル故、知行ハ徴収セズ、只扶助ノ考ヘニテ代官ヲ命ジ⁽³⁾

慶長六年四月豊後国速見郡由布院横灘ノ地二ヶ所ノ公料一万七千六百六十六石餘ノ代官ヲ命ゼラル、康之展々年貢ノ献ジタルモ家康受ケズ、蓋シ其家康之ヲ封ズルモノ⁽⁶⁾

由布院、横灘は江戸御料所であり、この地が老臣松井康之を通して羽柴越中守（細川忠興）の代官仕分であつたろうことは、前にも

のべた「人番改帳」や慶長九年の「速見・国東絵図之高帳」に松井佐渡守分として付紙されていることでも裏付けられる。そのように藩領ではなかつた由布院・横灘は、しかし、何時の頃からか小倉藩領の一部をなすに至つた。このことは元和八年の人番改帳において独自の支配機構をもつことなく、他の地域と同じく手永制を施行していることでも窺い知ることができる。

元和元年ごろの手永一覧には速見郡にはまだ手永を見ることができない（第七表参照）が、それ以後に小倉藩領に組入れられたものであろうか。

つぎに木付についてみると、この地は早くから松井佐渡守（康之）の知行地である。慶長五年春杵築城代として豊後に下向した彼は、関が原役の功によつて細川忠興が豊前を加封されるや、いちはやく速見・国東・宇佐三郡に二五、〇九四石余の知行を給せられたといふ。⁽⁹⁾この松井氏の知行地のうちでも速見郡木付（杵築）は、彼が最初に入国した土地でもあり、また彼の豊後下向には家康直々の命があつたらしいこと、さらに同じ速見郡のうち江戸御料所由布院・横灘の代官に任ぜられていることなどと併せて、他の二郡の支配とは趣を異にするように思われる。

この疑惑は元和元年ごろの豊後国における手永一覧に杵築地方のものが現われなければかりか、小倉細川領全域に手永制が施行されている元和八年に於いても、木付だけが手永に分けられないことによつてさらに強められる。木付の特異性が単なる偶然によるものでないことは明らかであるが、そのような存在が近世大名の行政組織の下で許されるとすれば、恐らくは松井氏の細川家における地位と切離しては考えられないであらう。細川家の家臣でありながら江戸御

料所の代官に任ぜられたほどの松井氏には、のちまで大和神蓋寺村の本領が伝えられているが、⁽¹⁰⁾木付もそういう意味で一円支配がその手に委ねられたのではなからうか。

二

細川領における地方支配機構として最も古いものは慶長十六年の捌（手捌）である。速見郡については第二表のような捌をみる。

第二表 速見郡の地域区分（慶長一六年）

地域	所在村名	捌分担当者
木付	上庄、下庄	勘解由、若狭、掃部、右馬廻
〃	上八坂、下八坂、歳田、真那井	半大夫、新右衛門、新兵衛、藤左衛門
〃	乙丸、荒木、徳野、津々良、山浦、畑、小平	次郎左衛門
由布院	幸野、水地、中園、下依、中依、平、山崎、石丸、経留湯、山ノ口、東畑	市左衛門
〃	前徳野、光永、石武、並柳、塚原	次郎右衛門
〃	石垣、立石、浜脇、別符	甚左衛門尉
横灘		助允

この捌および捌分担当者は、大雑把にみても木付と横灘・由布院とはその名称と支配地域に若干の相違を指摘できる。まず木付の

「小倉藩人番改帳一」により作成

第三表 速見郡の地域別石高（元和八年）

別	石	斗	升	合	勺	オ
別府助允手永	2873.8	6.6	1.1			
石丸次郎右衛門手永	2621.2	1.8	3.3			
石武甚左衛門手永	1274.4	1.6	6.1			
乙丸市左衛門手永	1369.4	3.0	3.8			
木付下庄	1618.2	8.6	0.0			
“ 上庄	1571.0	7.9	3.2			
“ 上八坂	794.0	1.3	5.2			
“ 下八坂	1517.0	4.9	7.7			
“ 浦分	353.2	3.7	9.0			

捌分担当者は上庄・下庄の四人は代官と称しており、その地域は上庄村を三分して勘解由、若狭、掃部が担当している。下庄および上八坂などの村々では右馬廻以下の者が一村ごとに支配する。上八坂・下八坂などでは庄屋を称している。

八坂方面では捌分担当者たる庄屋が居住する村には肝煎がいなが、彼らの在村しない地には必ず肝煎がおかれている。以上のことから木付における代官・庄屋は、捌分を担当するとは言うものの、その捌分の区域はあくまでも村的な範疇を出ないものであるように思われる。

一方由布院・横灘の捌は例外なく数カ村にわたるものであり、その居住する村においても捌分担当者とは別に庄屋が置かれ、またそれ以外の村に

も庄屋・肝煎などの村役人がおかれている。したがってここから由布院、横灘においては、木付と異なつていくつかの村を束ねる大庄屋といえる。村毎におかれている庄屋に

対して彼らは惣庄屋と呼ばれている。

両者の地方行政上の差異は、元和八年の⁽⁹⁾人番改帳によつて一層明確に示される。これによれば木付地方は長岡式部少輔知行分三・給人分二・蔵納浦手一の六冊からなり、それぞれ庄屋がおかれて差出人となつてゐる。由布院・横灘では捌・手捌の地域がそのまゝ、手永に継承されている。

元和八年における由布院・横灘の手永および木付各地域の石高は才三表の通りであつて、由布院・横灘の四手永の規模からすれば、木付には当然二・三手永が設けられて然るべき規模にあるが、事実木付には手永が設けられず、各村庄屋が村単位で郡代に直属している点、惣庄屋と同格に取扱われる存在であり、この点からも木付の特異性が裏付けられる。

前述のように木付の上下庄村の代官は極めて村庄屋的性格が強いものであつた。しかしながら少なくともそれらが代官と称せられることの裏には、代官的役割をも併せ持つたのではないかとの疑いも起る。慶長十八年速見郡・国東郡の代官所を徴すれば第四表の如くである。⁽¹²⁾これによつてみると、木付においては五代官所のうち慶長十六年の代官および庄屋のうち下庄の代官右馬廻と木付右馬廻が同じ地を領するものであり、しかも木付という苗字は地名と深い関連がある点から同一人と考えてよからう。同様に下八坂村の庄屋半大夫と工藤半大夫が同じ地を領し、且つ元和八年同地域の庄屋にも工藤半兵衛の所在が確かめられるところ半大夫が代官として登用されたものと見るべきであらう。もし代官所が藩庁の出先機関を意味するものであるとすれば、この二人は在地代官から藩機構に連なる代官所代官に登用されたものであらう。この際特に注目すべきこと

第四表 慶長18年における国東、速見郡の代官所

代官所名	所轄村名	石高	(上段…田 下段…畑)	年度
1 後藤与三右衛門殿 御代官所	乙丸, 荒木, 徳野, 津々良, 山浦, 畑, 小平	石 斗 升 合 勺 才		慶16
2 三上勘左衛門 "	阿子, 昌永, 道満, 糸永, 懸随, 杉山, 中野	1197. 9. 7. 4. 3. 5 270. 1. 5. 6. 2. 8		慶18
3 片山新五左衛門 "	西本, 小城, 横城, 栗多, 下原, 灘手, 狩宿, 大列	1014. 7. 4. 6. 9. 0 237. <u> </u>		"
4 尾形九郎左衛門 "	小野, 永松, 沓懸, 石丸, 釜口	1042. 0. 2. 2. 7. 9 295. 8. <u> </u> 3		"
5 木付右馬丞 "	下庄, 俣見, 菅尾	922. 4. 6. 1. 6. 0 62 <u> </u>		"
6 大嶋宗角 "	上庄	876. 8. 0. 4. 5. 0 336. <u> </u>		"
7 井上少左衛門 "	上八坂	528. 1 1. 7. 3. 9 255. <u> </u> 9		"
8 工藤半大夫 "	下八坂	728. 8. 6. 9. 6. 0 28 <u> </u> 0. 6. <u> </u>		"
9 村田二右衛門 "	歳田, 真那井	513. 6. 1. 2. 7. 0 170. <u> </u>		"

1は慶長16年「人畜改帳」による。1, 6, 7, 8, 9は速見郡, 2, 3, 4は国東郡である。5は速見, 国東両郡にまたがる。

は、木付右馬丞御代官所の範囲が速見・国東両郡にまたがることである。木付右馬丞が在地土豪からの登用であることからみて、旧時代の勢力圏がそのまゝ代官所の範囲となつたのである。従つてこの段階においては近世大名の土地支配組織としての郡代―惣庄屋―村庄屋―農民という郡単位制が行なわれず、土豪勢力との妥協の面がかなり強くみられるようである。これも捌の段階における一つの特色といえるであらう。

かつて木付にいた代官・庄屋のうち、元和八年の番帳によれば二ノ坂村(前)代官掃部の子助三郎は庄屋となり、鴨川村(前)代官若狭の子は百姓として登録されている。木付右馬丞が代官として登用されたのと對比して、慶長十八年には行政組織の改変が行なわれ、それにもなつて登用に差が現われたとすべきであらう。かくして木付の場合、慶長十六年の九捌は、慶長十八年には五つの代官所の所屬―恐らく五つの地方―に纏められ、それが元和八年の木付五庄屋となつて行くのではあるまいか。

以上代官所の変遷によつてみる如く、豊後国速見郡の地方行政上の変革は、慶長十八年前後にあつたといえよう。而してその変革は手永制施行に連なる性格でもあつた。

三

以上の如き前史をもつて小倉藩地方行政の単位として手永が設けられたのである。私見によればその初見は慶長十九年の「下毛郡伴天連門徒御改帳」である。慶長十八年速見郡においてはまだ捌による把握がなされているので、下毛郡のそれが手永の最初の用例であらうと思われる。たと前にも述べたように元和元年においても速見

第五表下毛郡深水惣左衛門手永における土地所屬（元和8年）

田口村	御蔵納	給人知行			
森山村		〃			
小袋村	〃	〃			
下深水村			惣庄屋知行		
嶋村		〃			
土田村		〃	御姫様領分		
臼木村	〃	〃	〃		
助部村		〃		休無様領分	
成常村		〃			
西株村	〃	〃	〃		
原口村		〃			
東株村		〃			
諫山村		〃			上知分
佐知村		〃			

上小倉藩人番改帳「三」による。

郡に手永が見当たらないので、速見郡の例が小倉藩全体を代表するか否か充分の資料とはなり得ないが、元和八年の由布院四手永が慶長十四年・十六年の捌と同一地域であり、惣庄屋も同一人もしくは同一名であるところから、慶長十六年の捌を継承するものであることは明らかである。慶長十九年の手永は捌制を改称して成立したといえる。このような「捌」から「手永」への改組には、木付右馬廻御代官所の例でみたように、中世的勢力範圍的色彩がつよい「捌」を、

近世大名の統治組織にふさわしく改組しようとする意図が働いたことは否めない。而して細川氏が豊後入国後十五年にしてはじめて全城を完全に掌握し得たとき、手永の施行となったのであろう。手永の区域は名の通り手捌きの範圍内という前提に立つものであり、第七表にみるように一郡を四ないし十四の区域に区分するものであった。手永内には蔵納地・給人知行地を含むもので、福島村半右衛門手永などとよばれて、惣庄屋の名を冠し惣庄屋を通して藩政機構に連なるものであった（第五表参照）。

元和八年の人番改帳において下毛郡の居地を当つてみると、加木野与左衛門は惣庄屋として御蔵納大窪村に住み、藤木（柿山）九郎右衛門尉は柿山村に住んでいる。この例でみる苗字が必ずしも村名と一致しないのは、慶長十九年の場合に村名が苗字的に用いられるのと対照的であつて、作爲的な感じがする。元和年間には惣庄屋の任命にも、在地家族の登用という原初的な形態を脱して転任・転住という場合も考えられるであらう。

惣庄屋が成立的に村名を冠することは、彼等の出自が在地土豪層にあつたことの証である。村内における惣庄屋の経営規模やその影響力をみると、宇佐郡の場合、第六表のような人番の構成をあげる事ができる。その平均値から惣庄屋の村内常時労働力は、給人番の一五％にものぼり、また恒松・中山両村の例でも判るように、惣庄屋の所有する人番は他村にも及ぶであらうからその比率が大になる事は充分推定できよう。

またその土地所有状態について由布院における惣庄屋石丸次郎右衛門の場合、石丸村の田畠高三九町一反八畝一三歩の一％に当る四町二反九畝一〇歩を所有し、また並柳甚左衛門は並柳村四一町四

第六表 宇佐郡における惣庄屋所有の人畜（元和8年）

	村人数	惣庄屋		村牛馬	惣庄屋		備考
山本村	161	34	21%	25	4	16%	山本少左衛門
日岳村	64	21	32%				日岳伝右衛門
赤尾村	505	37	7%				麻生善介
庄村	417	26	6%				庄三郎右衛門
山蔵村	138	26	18%				山蔵助右衛門
山村	158	93	60%	29	13	33%	山村与右衛門
疊石村	41	19	46%	7	3	42%	疊石新右衛門
五郎丸村	305	30	9%	61	8	13%	津布佐甚左衛門
宮原村	51	21	41%	4	2	50%	斎藤理兵衛
高森村	324	15	4%	45	2	4%	〃 孫左衛門
恒松村	44	15	34%	8	3	37%	中山鴻左衛門
中山村	91	23	25%	16	5	33%	〃 子二人の分
恵良村	164	16	10%	31	4	12%	恵良九郎右衛門
佐田村	248	19	7%	44	2	5%	佐田太郎右衛門
上船木村	33	11	33%	4	2	50%	高並又右衛門
田所村	49	23	47%				

反四畝一歩のうち二町四反八畝六歩余を所有し、さらにのちに移住した石武村にも田一六町二反四畝七歩余のうち三町五反九畝一六歩を伴忠介名で所有しており、こゝみると村内人畜の構成もさることながら、耕地の点からも大きな存在であるとせねばならない。

惣庄屋の所有地や人畜構成からみて、村内または郷村内への影響力は非常に大きなものであつたろうと思われる。逆に言えばその大きな影響力が、新任地における藩地方行政の末端機構として惣庄屋を登用させることになつたと考えよう。従つて惣庄屋として登用される地方土豪の影響力が捌（のち手永）の範圍になつたと思われる。

手永の範圍はこの条件によつてきめられたものであらう。それが手永の規模の大小を決定する因となつたのではないだろうか。地形や歴史的条件など村落結合の濃淡が、手永の規模を決定したと思われる。その結果が大は一万石から小は千石余までの手永となつたのであつて、手永制は単に郡をいくつか機械的制度的に分けて設けられたものでなく、地域的・歴史的条件を充分に考慮したものであつた。

新入国大名として豊後に赴いた細川忠興は地方土豪勢力を惣庄屋として把握し、その手を通して地方を支配したのであつて、手永制の設立にはそのような地方支配の苦心が見られるのである。花岡興輝氏によれば、寛永九年肥後に入国した細川氏が、その地方支配のため登用した惣庄屋の出自は、加藤家臣7、大庄屋9、阿蘇家臣5、名和家臣2、大友家臣2、菊池家臣2、小西・島津・相良家臣各1、中世の土豪7、石清水代官1の分布を示すといわれるが、そのいづれもが地方に大きな影響力を有するといわれる者たちである点、細川氏の地方行政上の特色といえよう。

そのような新入国大名の要望をうる農村把握力・影響力の持主は、大友氏の旧臣であり、大友氏没落後帰郷した土豪であることはいふまでもない。

豊後における惣庄屋の系譜が明らかなものは少ないが、国東郡竹田津手永の惣庄屋竹田津氏は竹田津庄の地頭で大友氏の直臣であつたが、重益の時惣庄屋に任ぜられたものである。富来氏は大友能直入部の際豊後下向した土豪であり、木付氏もまた木付下庄の地頭であり、いずれも大友氏の守護大名化に伴つてその被官となつたものであつた。竹田津氏系図は彼らの登用について次のように伝える。

一説 東照宮一日忠興公ヲ召メ曰、子カ家大友氏ノ熾臣ヲ多ク扶
持スルト聞カ、何ノ故ゾ。公対曰、臣曾テ亡国ノ臣ヲ愛スルニ
非ス、国倚郡地僻シテ戦國ノ餘習未タ除カス、旧国吏ノ民情ニ
熟スル者ヲ得テ、之ヲ治ムルニ非レハ能ハス、コ□ヲ以コレヲ
邑長村吏ニ仕フルノミ、……

新任大名として下向した細川氏が、戦国の余燼くすぶる土豪勢力
と妥協することなくしてこれを把握することが不可能であるという
事情が明らかにされる。而して土豪勢力が惣庄屋に任ぜられること
は、藩政の末端に連なり藩主より知行地を得て支配者層に属する存
在となつた。

土豪として耕地を所有し自営する反面、知行取りとして支配者層
に連なるといふ、惣庄屋の二重性格がその当初から開えられたわけ
である。

四

惣庄屋は前にも述べたように農村においてこそ有力者であり、大
土地所有者であるけれども、藩政機構においては全くその末端であ
つて、郡代の下に属する最下位の地位であり、従つてその知行と言
つても非常にひくく、身分的にも蔑視されるものであつたと思われ
る。元和年間における知行高は、譜本によつて多少の異同があつて
一定してないが、「豊前御侍帳」の知行高は次の通りであつて、大
体五〇石どまりと考えてよからう。彼らは一方では農民として名請
されているが、他方では知行をうけるものであつて、必ずしも自己
の高を自らの土地から得るものではないようである。この点薩藩に
おける郷土⁽³⁾や肥後の地土・一領⁽⁴⁾ととは異なつており、あくまでも

第七表 惣庄屋知行一覧（元和年間）

	15石	20石	30石	40石	50石	75石	其の他	手 数	永 年 数	人 口 数
規矩郡		2	3				三人扶持 3	8		6
田川〃		1	2	1	1		不明 1	6		7
京都〃			1		2			3		4
中津〃		1			2	1		4		4
築城〃			1	1	1			3		4
上毛〃				1	2			3		4
下毛〃	2	6	3	0	3	0		14		14
宇佐〃	2	2	4	1	4			13		15
国東〃		3	4	2	1			10		11
速見〃										4
	4	15	18	6	16	1	4	64		73

細川文書「豊前御侍帳」による。同文書「小倉藩侍帳」、「豊
前国ニ而之御侍帳」および元和8年「小倉藩人番改帳」と異同。

農民的な存在であるといえよう。
その土地知行の形態は、慶長十六年並柳村甚左衛門知行地五〇石
のうちに永荒ひらき分として、

光永村 田五反七畝二六歩
前徳野村 田七反六畝二七歩
石武村 田一反四畝二八歩

並柳村 田四反七畝二九歩

高合せて二〇石が含まれ、また乙丸村市左衛門の知行分として同捌内に、

永荒発 田一町九畝一三歩

新地開 田八反八畝一五歩

高合せて二〇石二合余が与えられている。速見郡が小倉藩の代表的な処であり得ない地であることは前にのべたところであるが、慶長十六年当時においては知行地が必ずしも惣庄屋の居住地に限られず与えられたことを示すものであろう。

元和八年下毛郡における惣庄屋の居住地（耕作地）と知行地（高）との關係は第八表のとおりであつて、こゝでも知行高は耕作地と必ずしも一致しない。下毛郡の惣庄屋の知行地の持ち方を詳細にみると、（一）惣庄屋が自己の高を含めて知行する例は非常に少なく、概ノ木猪介たゞ一例である。（二）自己の高は他の給人に属しながら、自己は別に惣庄屋高として本百姓・小百姓の高を知行する例は深水惣左衛門以下六人がこれに属する。（三）の例のように惣庄屋が自己の高を他の給人に支配されるのは、被支配者ノ農民として土地を所有し直接生産する立場にあることが強く現われる結果であつて、恐らく細川氏の地方行政の上で、惣庄屋を直接生産者（大土地所有者）の地位から切り離し、蔵入地から知行を与えたり、また知行地としての土地を与え、サラリーマン化しようとするものである。元和八年国東郡赤根村の三百三石五斗余が、国東郡における七人の御惣庄屋知行分とされているのは、惣庄屋が自己の土地から離されサラリーマン化した段階を如実に示すものであろう。こゝでは土地耕作者であり得ても所謂土地領主（土藏の手作）ではなくなつてゐる。

従つて惣庄屋を通してみた細川氏の対土藏政策は、一つには在地勢力と妥協しこれを利用することによつて農民を把握し、反面土藏を土地から切離し、農民との離反を通してその旧来の影響力を弱体化させる政策をとつたのであろう。土藏は所詮藩的権力者たり得ずあくまでも油断の出来ぬ相手であつたのではなからうか。地方の把握が藩政の最重要大事であることは佐々成政の例をまつまでもなく明らかな事実であるが、その故に細川氏はうまく土藏を利用したとも云える。

のちに肥後に入国した細川氏のもとで、手永制施行後一〇〇年後の宝暦年間に始めて惣庄屋の転任が現われるのは、対土藏政策に充分の成果が得られた結果でもあつたといえよう。而してその母胎は小倉時代に経験された地方支配に求められるのである。

その意味では、小倉領時代の細川氏についてはまだ研究がなされねばならない。

注（一）森田誠一「手永制度」『日本歴史大辞典』。森下功「肥後

藩手永・惣庄屋一覽」。「肥後藩の行政機構」『熊本県史近

代編第一』一〇五頁以下。

（二）「御家譜」忠興君、熊本県立図書館蔵、写本。

（三）『小倉藩人番改帳一』。

（四）松井文吾、熊本大学図書館蔵、慶長十六年「御倉納并知行分豊後国速見郡」によれば、同郡は、

豊後国速見郡内御倉入 羽柴越中守代官仕分

一高九千四百六拾壹石六斗六升五合式夕 由布院

一高千参拾壹石六斗参升九合

浜脇村

一高千参百貳拾参石壹升五合一勺 南石垣村
一高千貳百拾四石八升五合四勺 別府村
一高千貳拾貳石四斗参升四合 立石村
高合壹万四千五拾貳石八斗参升八合七勺

豊後国速見郡内 羽柴越中守知行分

一高千六百五拾六石参斗六升七合 下庄村
一高千五百七拾六石参斗四升参合 上庄村
一高八百三十五斗六升九合 歳田村
一高参百六拾貳石参斗九升参合 真那井村
一高八百八石参斗八升壹合七勺 上八坂村
一高千百参拾参石四斗参升八斗 下八坂村
高合六千参百四拾石四斗八升四合五勺

となつてゐる。

(5) 松井家記、興長条。

(6) 〃 康之条。

(7) 松井文書、慶長九年十二月六日「速見郡国東郡絵図之高似写帳」。

(8) 松井家記、康之条。なお細川文書慶長六年十月「知行目録」(仮題)によれば木付城付六、三七九石余、国東郡内一八、九八八石余、宇佐郡六二六石余の知行を得ている。

(9) 松井家記、康之条。

(10) 松井家記、康之条。康之以後も神童寺村の伝領は許されている。

(11) 『小倉藩人番改帳』五。

(12) 松井文書、慶長十八年十月「御蔵納田畠物成帳」。

(13) 『小倉藩人番改帳』五、三四四頁、四五三頁。

(14) 全右、三八六頁。

(15) 全右、三二五頁。

(16) 「熊本史学」第一九・二〇号、五九一六六頁。

(17) 松井文書、慶長十八年「速見郡由布院村々新地永荒開御帳」。

(18) 年代的に慶長十三年ごろの例で手永を称するようなもの(川口恭子「近世初期走百姓について」、『原田敏明教授退官記念論文集』所収)もあるがそれは後のへんさんであり、手永の地を前代まで廻及したものである。

(19) 『小倉藩人番改帳』五。

(20) 全右三、二〇六頁。

(21) 速見郡並柳村甚左衛門は慶長十四年、十六年には並柳村に住んでいるが(『人番改帳』二)、元和年間にその子忠介と石武村に移住し(「先祖附」、並柳村には弟百兵衛が残っている)。

(22) 第五表参照。

(23) 松井文書のキリシタン史料(「熊本史学」第一九・二〇号所収)によつて下毛郡の惣庄屋が殆どキリシタンになっているが、石丸村で村人の全員がキリシタンになったのは惣庄屋の影響によるものであろう。

(24) 国東郡における中世的郷荘と手永をみると高田庄↓高田手永、竹田津庄↓竹田津手永、安岐郷↓安岐手永、田染庄↓田染手永、富来庄↓富来手永など、歴史的條件が重視されていることを知る。

第八表 惣庄屋手作地と蔵納、給知別所腐—關係分—

(元和八年下毛郡の場合)

[illegible]

「小倉藩人番改帳三」により作成。 ※石高は合以下省略。 ※※給人名の上の。は惣庄屋を表わす。

(25) 花岡興郎「肥後藩初期における御惣庄屋の出自について」昭和三十五年西日本史学会秋期大会報告。

(26) 大分県史料によれば速見郡真嶽城守として一万二千石を領した辻間越後守は永禄二年早川主馬が日出一万石を拝領した際に辻間村日出村五千二百石の惣庄屋に任ぜられ(11一三三三頁)、また秋吉幸氏は大友氏没落後畑村し、以後杉原、松井氏の任官に応じなかつたという(10一五三三頁)。(27) 外山幹男「守腰大名としての大友氏の性格」ヒストリア 18号。

(28) 全右。

(29) 大友史料②二七八。

(30) 外山前掲書。

(31) 『大分県史料』10一四二頁。

(32) 細川文書。

(33) 原口虎雄「薩藩郷土生活の経済的基礎」(『九州経済史研究』第一集)

(34) 『熊本県の歴史』一八五頁(文圃堂)。

(35) 松井文書、慶長十六年「由布院之内田島永荒新地開並二物成目録」。

永荒開慶長拾三年分

右之外也

慶拾三年之中

但基左衛門ニ被下候知行分

一田数合五反七畝廿六步

光永村

分米五石貳斗八合

同

一田数合七反六畝廿七步 前徳野村
分米八石壹斗七升二合七勺

同

一田数合壹反四畝廿八步 石武村
分米壹石三斗四升四合

同

一田数合四反七畝廿九步 並柳村
分米五石貳斗七升六合四勺

右田数合壹町九反七畝貳拾步

分米貳拾石者基左衛門ニ被下候知行

但高五拾石之内也

(36) 松井文書、慶長十六年「速見郡由布院之内田島永荒新地発御中」。

慶長拾六年九月拾八日

乙丸村 市左衛門 花押

一田壹町九畝拾参歩

永荒発

分米拾貳石三升七合六勺八才

一八反八畝十五歩

新地開

分米七石九斗六升五合

二口合壹町九反七畝廿八歩

市左衛門ニ被下候分

分米貳拾石貳合六勺八才

(37) 『小倉藩人畜改帳』三。

(38) 森山恒雄「近世初期肥後国衆一揆の構造」九州文化史研究所紀要第七号。

(39) 花岡興郎「肥後藩初期における御惣庄屋の出自について」、森下功「肥後藩の行政機構」。